

養育者から子どもに対する援助の相互行為分析

乾友紀(大阪大学大学院生)

1. はじめに

幼少期の子どもは、日常の様々な場面で養育者をはじめとした大人からの援助を必要としており、家庭内において、養育者から子どもに対する援助行為は数多く観察される。Kendrick&Drew(2016)によれば、援助(assistance)とは、ある参加者が行為を実現しようとするときに生じるトラブルや困難を別の参加者が解決することである。つまり、養育者が子どもを援助するとき、養育者は、子どもがある行為を実現する上で、子ども自身では解決できないトラブルや困難が生じている、あるいは、これから生じると捉えていえるということである。一方、援助の受け手となる子どもは、養育者の援助を受け入れるだけでなく、拒否する、つまり、自身で解決しようと試みることも見られる。本発表では、家庭内における養育者—子ども間の相互行為における養育者の援助行為に着目し、マルチモーダルな相互行為分析を行う。

2. 先行研究及び問題の所在

幼児期から学童期にかけては、食事や着替え、トイレといった日常生活動作の援助のみならず、将来的にトラブルや困難を回避し、滞りなく行為を遂行できるようにインストラクションを伴って行われるものも観察され、あらゆる行為において養育者が介入し、援助行為を行っていると言える。

会話における援助行為を分析したKendrick & Drew (2016)は、他者からの援助を引き出す前に補助的な行為がなされる場合があるとし、それにより、何らかの困難が生じていることが理解可能となるが、補助的な行為の直後よりもトラブルの明示的な示しや明確な援助要求がなされた後に援助がなされると指摘している。それは、トラブルを抱える当事者が自身でトラブルを解決することが優先されるということを示唆するものである。しかしながら、養育者から子どもに対する援助は、子どもによる補助的な行為や明示的な要請よりも先立って行うことができるものであると考えられるとの指摘もある(牧野・坂井田・居關・坊農, 2020)。このような養育者による援助に対して、子どもは拒否を示すこともあり、養育者と子どもの間で誰がトラブルを解決するのが交渉されることとなる。本発表では、養育者がいかにして子どもに生じた(生じる)トラブル・困難に対して援助を提供し、受け手である子どもはどのように応対しているのかを明らかにすることを目的とする。

3. データ

本発表で扱うデータは、関西在住の5組の親子による相互行為データ(計30時間)、及び援助場面を抽出した上で作成したトランスクリプトである。集まったデータについて、言語行動及び非言語行動をマルチモーダルに分析(Goodwin, 2000; Mondada, 2018)を行う(文字化はMondada, 2009参照)。

4. 分析

以下に、養育者—子ども間の3つの相互行為の事例を取り上げる。また、いずれの事例においても匿名性保持のため、参加者の名前は仮名としている。

【事例1】参加者：父、母、姉ひまり(6歳8ヶ月)、妹いつき(4歳8ヶ月)

01 父 : やり*たい[言うたのあなたよ。

父_bd : *ひまりを指差す

02 ひまり : [(泣き声)]

03 父 : はいはい。頑張って頑張って。

04 母 → : [はいはい+手伝ってあげる。はい+せいの…:]

母_bd → : +ひまりの腕を掴む 図A ひまりの上体を反らす 図A ひまりの上体を反らす

05 父 : 泣いてたら力入れへん。



抜粋の前にひまりの妹がストレッチをしており、ひまりもストレッチ（うつ伏せに寝て上体を反らす）を始めた。しかし、ひまりは自力では上体を反らすことができず、泣き始めた。

上体を反らすことができずに泣いているひまりに対して、父は指差ししながらひまり自身がこのストレッチをすることを希望したと指摘している(01行目)。ひまりは泣き続け、上体を反らすことができずにうつ伏せの状態のままである。それに対して、父は「頑張って頑張って」と応援を始める(03行目)。また、その発話に重なる形で母は「手伝ってあげる」と援助を申し出ながら背後からひまりの両腕を掴み、「はいせいの…:で」という掛け声とともにひまりの上体を反らすという援助を行う(04行目;図A)。その援助行為によってひまりは上体を反らすことができたが、泣き続けている。父は、母の援助によって持ち上げられた上体の位置を維持するためには、ひまり自身が泣かずに力を入れなければならないことを教え示している(「泣いてたら力入れへん」)。

事例1は、困難が明示的に理解される状況(子どもが泣いている)において、養育者による援助の申し出とともに援助行為がなされることが観察された。

【事例2】 参与者：父、母、兄まさとし（7歳5ヶ月）、妹かんな（5歳6ヶ月）

01 まさとし：+いえ……い。

まさ_bd：+ホットプレートへ手を伸ばす→

02 : (0.7)+

03 まさとし：+あ[つ。

まさ_bd：+ホットプレートから手を離して、母を見ながら手を上下に数回振る

04 かんな： [(…)((カメラの画面の外にいる))

05 母 →：*この方がいいんじゃない？

母_bd →：*ホットプレート上の爪楊枝を刺した玉ねぎを指差す

06 :*(0.5)

母_bd：*手を戻す

07 母：*これ分厚いから+(0.3)(…)つけて。 = +(…)とこ触ったら熱い。

母_bd：*別の具材を指差す

まさ_bd： +手で玉ねぎを取ろうとする+手を振って指を口に入れる

08 母 →：*取ってあげる。

母_bd →：*図B 手で玉ねぎを取ってまさとしの皿に入れる→

09 (0.9)*

:—→*

10 まさとし：ありが↑+と。

まさ_bd： +ホットプレートに手を伸ばして別の玉ねぎを取ろうとする→

11 母：° どういたしまして。°

12 : (0.2)

13 母：いける？+

まさ_bd：—→+

14 :+(0.5)

まさ_bd：+一度玉ねぎから手を離して別の玉ねぎを取ろうとする

15 母：取ろうか？

16 まさとし：いや。



図B 母が兄の皿に玉ねぎを入れる

夕食の時間、母と兄まさとしが向かい合う位置で座っている。抜粋の前に父がホットプレートの蓋を開けており、まさとしは「いえ……い」と言いながらホットプレートへと手を伸ばし、具材を取ろうとする(01行目)。しかし、「あつ。」という発話とともに手を離し、上下に数回振る(03行目)。その時の視線は母へと向けられており、この発話は母に対するものであると考えられる。一方で、母はホットプレートの方へ視線を向けており、別の具材(爪楊枝を刺した玉ねぎ)を指差しながら「こっちの方が(取る/食べるのに)いいんじゃない？」と、どれを取るのがいいのかを教えることで援助を行う(05行目)。さらに、別の具材を指差しながら「これ分厚いから」まだ火が通っていない(あるいは取りにくい)と説明している(07行目)。まさとしは再度手で具材を取ろうとするも、01行目と同様に熱さから手を上下に振り、その後指を口に入れている(07行目)。そして、母は「取ってあげる。」と援助を申し出ると同時に手で具材を取ってまさとしの皿に入れるという援助行為を行う(08行目;図B)。援助を受けたまさとしは、「ありが↑と。」と感謝を伝え、母は「どういた

しまして」と応答している。

まさとしは「ありが↑」という発話の途中でまた別の玉ねぎを取ろうとしており(10行目)、母は「いける?」や「取ろうか?」と質問しながら援助が必要かどうか確認している(13, 15行目)。それに対してまさとしは「いや」と否定し、この抜粋の後に自分自身で玉ねぎを取っている。

事例2では、困難が生じていることが理解される状況(熱さで具材が取れない)で養育者が援助を申し出るとともに援助行為を行うが、そのすぐ後では援助が必要かどうかを子どもに確認し、子どもが否定したことを受けて援助を行わずに見守ることが観察された。

【事例3】 参加者：母、ほなみ(5歳3ヶ月)、ふみか(3歳1ヶ月)

01 母 → :ふみか何出すん?出したるよ。

02 ふみか :ふみか出す。

ふみ_bd :>>絵の具を持つ

03 母 :ふみか出すって+ふみか出せるん?

母_bd : +ふみかの方へ手を伸ばす

04 +(0.9)

母_bd :+手を戻す

05 母 :*固いで、結構。

ふみ_bd :*両手で絵の具を握る→

((06-10行目中略))

11 ふみか :出な::い。

12 母 :鏡ない+な。鏡持って来たろか? ((姉に対して))

母_bd : +ふみかから絵の具を取ろうとする

13 ほなみ :鏡ふみか持って+来て。

母_bd : +#C ふみかの手を絵の具から離す

14 +*(1.0)

母_bd → :+絵の具の中身を出す

ふみ_bd :*絵の具を取ろうとする

15 母 → :待って。ママやる。固いから。



姉妹が絵の具を使ってお絵描きをしており、母はそばでその様子を見ている。ふみかに対して、母が「何(色の絵の具を)出すん?出したる(出してやる)よ。」と援助を申し出ている(01行目)。それに対してふみかは、「ふみか出す。」と宣言して母親からの援助の申し出を拒否し、自分で絵の具を出そうとする(02行目)。母は、ふみかの発話を引用しながら、「出す」を「出せる」という可能の形に変えた上でふみかの能力について確認をしている(03行目)。また、それと同時にふみかの方へと手を伸ばすが、絵の具は取らずに手を戻し、絵の具を出すことの難しさを伝えている(05行目)。ふみかは、絵の具を出そうと試みるも出すことができず、「出な::い」と困難を訴える(11行目)。それに対して母は絵の具をふみかの手から取ろうとするが、ふみかは絵の具を離さず(12行目)、母は右手で絵の具を持った状態で左手でふみかの手を絵の具から離す(13行目;図C)。そして、母は絵の具を出し始めるが、それと同時にふみかは母の手から絵の具を取ろうとする(14行目)。それに対して母は、「出したるよ。」(01行目)から「ママやる。」という表現へと変え、また、母が援助することの理由説明を行い(「固いから」)ながら援助を行っており、ふみかはその様子を見ている。

事例3では、困難が生じることが予測される時点で養育者が援助を申し出るが、子どもがそれを拒否し、困難が生じたところ(絵の具を出すことができず、困難を訴える)で養育者による援助行為がなされることが観察された。

5. 考察

本研究では、3つの事例から、養育者がどのようにしてトラブルを抱えている子どもを援助し、また、受け手の子どもがどのように対応するのかをマルチモーダルに分析した。

養育者による援助行為は、今、ここで生じている困難(事例1:子どもが自力で上体を反らすことができない、事例2:ホ

ットプレートにある具材が熱くて取れない)を解決するのみならず、これから生じるであろう困難(事例3:子どもが絵の具をチューブから出すこと)を予測して援助の申し出がなされることも観察された。一方、子どもは、養育者からの援助を受けるだけではなく、自身で解決することを示すこともあり(事例2の後半, 事例3), それにより養育者が一度援助行為を止め、子どもが困難を訴えた後に援助を行う(事例3)など、援助行為は相互行為的になされるものであるということが明らかになった。

また、養育者による援助行為は、「手伝ってあげる」・「取ってあげる」・「(絵の具を)出したる」といった援助の申し出とともに見られたが、事例3においては、「出したる」という援助の申し出が子どもに拒否され、その後「ママやる」という断言する表現へと変化することも観察された。「てあげる/てやる」という授受補助動詞の使用により、誰が援助を与え、それによって誰が利益を受けるのかが示されていると言え、援助行為とともになされる申し出により、子どもは恩恵がどこからどこへ向かうのかを理解していくと考えられる。

謝辞 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2138 の支援を受けたものである。

参考文献

Cekaite, A. (2016). Touch as social control: Haptic organization of attention in adult-child interactions. *Journal of Pragmatics*, 92, 30-42.

Goodwin, C. (2000). Action and embodiment within situated human interaction. *Journal of Pragmatics*, 32, 1489-1522.

Kendrick, K. H., & Drew, P. (2016). Recruitment: offers, requests, and the organization of assistance in interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 49, 1-19.

牧野遼作・坂井田瑠衣・居關友里子・坊農真弓 (2020). 子供を「主役」とする教育的活動の相互行為分析-博物館における展示物解説を対象として- *社会言語科学*, 23(1), 116-131.

Mondada, L. (2009). Emergent focused interactions in public places: A systematic analysis of the multi-modal achievement of a common interactional space. *Journal of Pragmatics*, 41(10), 1977-1997.

Mondada, L. (2018). Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for Transcribing Multimodality, *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85-106.

表1 トランスクリプトに使用した記号

記号	意味		
(数字)	0.2 秒以上の間 (数字は秒数)	↑↓	音調の極端な上がり下がり
(.)	0.1 秒以下の間	° °	音が小さい部分
[]	発話が重なる部分	(())	注記
:	音の伸ばし(一つで0.1 秒を示す)	(…)	聞き取りが困難な発話
?	上昇イントネーション	=	間がなく繋がっている発話

非言語行動の表記については、Mondada (2009) に基づき、その発話行の下段に記述した。+,* といった記号は参与者の動作開始点・終了点を示す(1 つの事例内では1 種の記号を特定の参与者に利用している)。